小さな願い

時田俏哉（前原西・55歳）

八月十五日、正午。

この日この時間をすでに、何回繰り返したことだろう。

戦後という言葉も過去の言葉となったけれど、私には、ついこの間のように思い出される。

正午に天皇陛下のお言葉があるから、みんなよく聞くようにと云われた。

ラジオのスピーカーから流れる天皇陛下の声は何を喋っているのか私にはわからなかったが、

「東京に帰れるよ」

という声だけが私の耳に強く残った。

空を見上げたら、真夏の青い空にB29の機体が光った。

「戦争が終わったよ」

「戦争が終わったよ」

「みんな東京に帰れるよ」

みんな東京に帰れるよと聞いて、学童の顔に笑いが戻った。

「東京に帰れる」

東京に帰れると思いながら、果して、何人の学童がこの疎開先から戻っていったであろうか。

小学校三年生になった我が娘を眺めたとき、いかに、平和が有難いことかと熱い涙が流れてきた。

昭和十九年夏、東京は東神田より長い汽車の旅は、埼玉県の行田駅に着いた。

沿道では、生徒たちが小旗を振って迎えてくれた。

暑い夏の日差しを額に受けて、汗がにじり出る中を港屋旅館に向った。

旅館に着くと疲れがいっぺんに出てぐったりとなったが、地元の人達が大勢出迎え梨を剝いて出してくれた、その時の美味しかったこと、今でも忘れていない。

私は当時小学校三年生、学童疎開者としてこの行田の町に着いた。

この町は、静かなところで、私達がこれから我家となる旅館の前の道をまっすぐ行くと橋があり、両岸には、桜の並木がつづいていた。橋を渡ると田園風景が目の前に広がり稲穂の波がまず珍しかった。

「学校へ行って見よう」

と夕方誰ともなくいいだしたので、ほとんど全員がこれから私達が通う学校（忍北小学校）を見に行くことになった。

とにかく遠いのには驚いた。田舎道はなんと不便なんだろう、意地悪なことにS字型の道なのである。向うが見えていても遠いのにはまいった。

私は、あたりが暗くなってしまったので、途中で断念したがあと一息だっ

たらしい。

どうにか辿り着いた人に聞いて、びっくりしたことは、校庭の広いことで向側が見えなかったと云うことであった。この遠い道が、私達都会生活者の幼ない児童に苦難の通学路になるのである。

登校時は遠いのを我慢すればなんとかなるが、下校時の日照りの中をてくてく歩いて行くのはかなり疲れる。それでも運がよい日は、牛車に乗せてもらいほっとしたひとときもあった。

なんといっても辛いのは、寒さがやってくる季節である。横なぐりの風雨は幼ない手や足を叩きつけるばかりか、学校の方針で疎開者の区別なく裸足で通わなければならない。

足には凍傷ができ、踵からは皹のため血が流れ、寒さと痛さのあまり涙を流しながら砂利道を跛を引きながら通ったあの辛かったこと。

授業は、私達疎開者だけのクラスで不都合なことはなかった。

校長先生の計らいで、特に疎開者の私達にはいろいろと気をつかって下さったらしい。

正月には、せめて正月気分を味あわせてあげようという心づくしの歓迎に生徒の家に呼ばれてご馳走になり、この日ばかりは腹一杯食べた。

私達の日常の食事は、丼一杯のご飯と味噌汁お新香と一品料理である。好き嫌いはいってはいられず、食べられることだけを感謝しつつ食前の祈りを捧げた。

楽しみは、やはりおやつの時間である。空腹を抱えて今日はおやつがあるのかないのか半信半疑で待ったものである。

「おやつですよ」

と呼ばれると、みんな一斉に集まり小さな皿にのったさつまいもを少しでも大きいのを早く取ろうとして、揉み合う惨めな欠食児童たちの競争でもあった。

疎開して月日もあまり過ぎないころは、よく親が尋ねて来てくれておみやげのお菓子をいっぱい持って来てくれる。このときの有難いこと親に会える喜びよりも、お菓子を楽しみにし一つ一つを大切に食べた。

それも戦争が激しくなるに従って、唯一の楽しみは次第にうすれていった。

このころになると、農家の軒下に干してある乾燥いもを盗みに出かけたものである。時には近所の人にふかふかのさつまいもを戴くという幸運なときもあった。

春が来て上級生は、それぞれの中学校に入学のため帰っていった。それとともに、私達数十名の生徒だけになったため、お世話になった港屋旅館を引き上げ宝積寺というお寺に移った。

ここでは、男女共同の生活に変わったのである。なにしろ兄さんから姉さんに変わったので戸惑った反面、なんとなく嬉しいという気持ちが胸にこみ上げてきた。

しかしながら、もともと腕白な私には、ここでの生活はしだいに馴染めなくなったし、息苦しくもなってきた。

近所の農家へ手伝いに行かされても、そこの子供と喧嘩し、相手をやっつけて意気揚々として引き上げたあと、先生に叱られて往復びんたをもらったものである。

丁度そんな時期に、清水の兄さん（私はそう呼んでいた）を知り得た。家が農家で忙しいのに毎晩のように訪ねて来て、私を弟のようにかわいがってくれた。

近所の家に順番に風呂に入りに行くのであるが、清水の兄さんの家に行くのが待遠しかった。

ある晩、風呂に入ったらすぐに帰ってくるように云われた。この日に限って念を押されたので、なんだろうと思った。

「これから清水の兄さんの家に行くんだよ」

と云われ暗い道を急いだ。

家に近づくに従って子供ながらいつもと様子が変だと思った。部屋に入るとどうしたことか短剣を胸に置いて寝ている人がいる。

「清水の兄さんだよ」

と云われても私にはわからなかった。その時、家の人が静かに顔に掛けてあった白い布を取った。

「あ、清水の兄さんだ」

と叫んだ。

「清水の兄さんが死んだんだよ」

と、この時はじめて清水の兄さんが亡くなったことを聞かされた。

「よく遊びに来てくれたなあ」

といって、今にも起き上がりにっこり笑って手を差しのべてくれるような気がした。(戦後数年ののち宝積寺にある清水の兄さんの墓に行き静かに涙を流した)

二度目の夏が来た。

今日ばかりは蟬の鳴声がやけに耳に響く、

「戦争が終わったよ」

「戦争が終わったよ」

「東京に帰れるよ」

と誰かが叫んだ。